奥羽観蹟聞老志　十二

太政官文庫
和書門
七八一七號
一九八函
一二架
二〇冊

内閣文庫
和書類
七八一七號
二〇冊
乇四函
二一架

内閣文庫
番號　和　7817
冊數　20（12）
函號　174　263

国立公文書館
National Archives of Japan

奥羽観迹聞老志巻之十二

名勝類外集

此篇在吾太守封疆之外得称名地勝蹟者復采古歌及諸家之説輯備参考矣然以地理方隅之不詳而未遑尽分郡縣村落云

伊達郡

阿津賀志山 事迹考作厚樫山

在貝田駅東大木戸村辺下 事詳刈田関門

東鑑曰後鳥羽帝文治五年七月十九日頼

明治十二年購求

朝郷帥数千騎発鎌倉赴于陸奥国欲征藤
泰衡也泰衡構要害于前途以異母兄錦戸
国衡将二萬兵守伊達郡阿津賀志山構五
大湟于阿津賀志国見宿閒漲逢隈河流令
金剛別當父子将千余騎以拒幕下

国見澤

国見山尤大高山聳路西其下乃国見沢也
国見宿者乃今貝田是也
同年八月七日頼朝郷到伊達郡国見沢

葛松原

在桑折駅西松原村北或曰笠石松林

西行法師

世の中の人にハ葛の松原とよはるゝ名こそ嬉しかりけれ

阿武松原

在桑折駅東南笘﨑村正東

皇后宮にて人々恋歌よみ侍りける時に

よみ人知らす　大宰大弐長実

金葉集恋下

みちのくのねはひしのふにあらねともいかにかけたるあふくま松

行尊

あふくま松原陸奥　又たつねまし　かはくし

正三位季經郷

はるをまつ花ても桜のむとや来ぬはらをとふ行かぬ手向くらむ

柳関

在来折駅北泉田村西南繁紀山山上乃往昔関址也

家集寀路帰居　おきへの北寀　淡路　源仲恵

夫木集
雲路にもおきへ北寀の行ませはやまくち居北つへ行はなし　よそ人志らに

日
稀にまつく恋もつきゝあふに心ときやく人をおきへの寀もとへ行ん

柳池

繁紀山半腹有池塘是乃柳池也

右西區在玉造郡
名事詳其下

岩志ろ波　みちのく　よみ人しらず
おもへとも人目をつゝむ柳の池かくれぬ恋きつ事

憩休松

在貝田駅西往昔實方中将東行倚此松根而憩息之地也古松猶存

下紐関

在貝田駅西南国見山下往古有関門衛人土人曰之伊達大木戸

左大臣公名

新後拾今
ならのはや露さえてんかなひさへもとかけ無下紅葉の錦

季經朝臣

六百番
あひ見んとおもひし夢る中なれやかくとけにし袖下ひもの雲

橘為仲朝臣

こちかせの寄るくくるくる雲の

大皇太后宮小大輔

たえまなきはれとき

なくなる

太皇太后宮甲斐

詞花
東路の野島か崎の浜風にわかひもゆひし妹かほの雲

大中臣能宣

新後拾遺恋一
現とも夢とも人を思ほえて見しとかきそめしも紅葉の雲

信夫郡　一作篠生
先代旧事本記曰信夫国造志賀高穴穂朝（乃十二代景行）御世阿支国造同祖久志伊宇命孫
久麻直定賜国造
天皇本記二十三代清寧帝五年二月天皇
詔以物部木蓮子連遣東海陸奥諸国出州
分大郡出縣自陸奥出津軽會津篠生出羽
定撩国造規畫縣主別紛宮田首田分別串
憶乇倉至此御代国事分明
天孫紀猿田彥大神奉両命即考懸勲肯御

矢将八十武神発於五瀬国蹈動八雲路光
耀鳴震以至於篠忍国
四十四代元正帝養老二年夏五月乙未割
信夫郡等五郡置石背国
四十八代称徳帝神護景雲三年三月辛巳
陸奥国信夫郡人外正六位上文部大庻等
賜姓阿部信夫臣同郡人外従八位下古祢
侯部足山等七人賜姓下毛野静屈
五十代桓武帝延暦元年五月乙酉陸奥国
人外大初位下安倍信夫朝臣東麻呂等献
軍粮授外従五位下
五十三代淳和帝天長七年十月己未山階
寺僧智興造建陸奥信夫郡寺一区名菩提
寺預定額寺例
五十四代仁明帝嘉祥元年五月辛未陸奥
国信夫郡擬主張大田部月麻呂賜姓阿部
陸奥臣
神名帳曰信夫郡五座 大一座 小四座 鹿嶋神社
黒沼神社 名神大 東屋沼神社 東屋国神
社 白和瀬神社

哥林良材にみちのくの信夫郡よりしのぶもぢずりを
とりてみせしよりおこりたるものなればしのぶの
もちずりといふなりと
千載集右大将兼長奏自然に何とも公卿より
なにゝ作りし事なくして恭にて結縁の子結縁の
人は信夫の人にて生事なる事ありしよりさてき
法事に信夫にてあるに
東史曰藤基衡贈信夫毛地摺千端于佛工
雲慶云
故に信夫郡なる宗形内卿入道師綱

陸奥守にて下向の時基衡押領一国如無
国威仍奏聞してかた田申下宣旨検注公
田之処基衡奏聞不能之由にて入
国使而に居住宣旨撿注の間可随御
信夫郡地頭大庄司季春を合せて国
司郡半分之内へ入る以て放火及合戦
守方被疵者多奏聞之由之を
して宣旨討国司信夫の拾季春を
信夫を倍雖追返国司宣旨之条恥無
遠勅之恐にてつきとゝもし季春云にま

仰ちは兼て皆存たる事なれと主君の命依難
背かれす一矢に射倒候ぬハ君ちからなく存候
を仰まして已か頸を石つらに国司に許すへき
ものの上に宣旨なれは驚きて泰衡か私従し
たる泰衡か守を云泰衡ニ切て存する事承知
此既ハ信其先へ今自由に振舞ありては
不及子細季衡ハ泰衡ニ不忠して成年罪編
依使ちをもて可斬頸ことし依て国司
遣検非違使不日代季衡已にちせさせ
四十余計の男肥満なる頸を居

夜干小縛りし知らぬ事を名にて打捨てたる事也
二十人有りし囲遠く切ちらす季衡は浦ちかきに云
去也出て振切頼之間忠衡切損して
刀を何小へ不及れハ切て云自ら泣帰たまか
大津越将は云きれハ捕へん為しれいひくきに
鞍より郎等五人目切く大津残とハ人を以て
在寄く切殺りたる者の首ハへと申骨不残切を
いふなる泰衡季衡を悟不承に不存て孫
まして振り捕め人く泣流し体再三遣妻女
を国司鉄気請さる勢きつての後を請料もの

凡その[illegible]料[illegible]も一筆あら[illegible]
補[illegible]切[illegible]

一日讀故事談得信夫郡大荘司季春忠
死之一事慨然泣血如雨烏乎季春眞之
忠臣也基衡又何心耶欲免己之罪悪而
行一不義殺一不辜於己則苟偷生免死
而安顔厚焉不義無道孰甚焉宜哉子孫
遂為烏有赤其族也然季春之忠死世未
嘗知之唯無没于冊子中於是甚恨之然
幸其事實在此書挙之以旌彼忠識于世

識者念茲

信夫

藤原基衡二[illegible]郎[illegible]奥州信夫郡[illegible]
[illegible]刈[illegible]や[illegible]
[illegible]
按此地産黄鷹見能因歌

女[illegible]
[illegible]
後拾遺
[illegible]
[illegible]

太宰大弐長実

金葉 恋下
みちのくのしのふ思ひはありなからこゝろにかゝるあふのしのふら

大中臣定雅

千載 恋一
わか恋はしのふの奥の海をふかみなかれもやらす知人そなき

右大将頼朝

新古 秋上
みちのくのいはて忍ふはえそしらぬかきつくしてよ壺の石ふみ

為家

続拾遺 恋一
いつまてか恋は果なきみちのくの思ひを岩手にいはてやまさん

家隆

玉葉 恋二
いかにしてしのふさてみちのくのおくの思ひのこゝろをも人にかきら

日
源三位頼政

いかにせむありやなしやとみちのくの思ひしのふとちゝのことの代

従三位為子

新千載 秋上
秋風にみたれてものや思ふらん陸奥のしのふもちすり萩か花すり

能因法師

みちのくのしのふのとくと思ひつへてちゝ原さら紛らはさて

中務卿親王

続古今
みちのくの思ひしのふのるみかねてかるかしとしのふのしらせ

信夫奥

大中臣定雅

千載恋一
よその床は志のふ山奥のさい苔原一ゆかりとし志る人ゑなき

続後撰恋二
千五百番歌合に　右大納言
語まし思ひわふつきしみちのくの思ひ思ふの杉くれのよし路

文治六年百首か歌中に　定家

新後撰恋下
尋ねるや志のふの杉くの浦ふかき風より志られぬるや神の杜

治暦二年左大臣家歌合　後朱

夫木集恋
惜きる時まれか程くらんみちのくの志のふの里ゑうらはまの路

法三経基位行氣公

山家集
あはれをちし思ふの杉く人来すしやはゝ志ゆかしき白川の関　西行

六百番歌合　家隆
杉ゆひやまおろしの嶺おろして志のふの杉をさすつね人らん

行念
みちのくの思ふの山の奥まてもおなし心に尋来ちらん

信夫山
福嶋駅北突兀峰巒是所謂信夫岳也上建
羽黒權現神祠郡山相峙層嶺相連
むかし陸奥まてなたてつきてなきんの女は

かゝるいなかにはいやしきやうまでもいひつべき
女ともありけんとおもへハ
新勅撰集に載たる詞書云みちのくにへまかり
ける時めにつかはしけるとなん
業平朝臣

伊勢物語第十五
しのぶ山忍びてかよふ道もがな人の心のおくも見るべき
二条院御時百首歌

千載夏
時鳥猶ひとこゑをしのぶ山夕ゐる雲の底になくなり
祝部成仲

同恋上
君恋る涙しぐれと降ぬれはしのぶの山も色づきにけり
三條院女蔵人左近

同
いかにせむしのぶの山の下紅葉しぐるゝまゝに色のまさるを
春日野ゝ野の雪合に若菜つみけむ人の跡もなし
七条院大納言

新古今
はつしぐれしのぶの山のもみぢ葉を嵐ふけとは染ずやありけん
清輔朝臣
人しれず苦しきものはしのぶ山下はふ葛のうらみなりけり
和哥所歌合に忍ふ恋の心を
雅経

同
消えかへりしのぶの山の嶺の雲かゝる心の跡もなきまで

千五百番哥合に　　通光

かきりあれはしのふの山のふもとにも落葉かうへの露そいろつく

雅経卿家哥合し侍けるによみ侍ける

忍恋　　俊成

新勅撰恋二
人ふしてしのふへなきとも君ならんしのふの山のおくの石つ路

寂蓮法師

同新四
しのふ山木の葉にしらて下葉にはなにとまれとる露の色かな

同院摂政家百首に

忍恋　　入道摂政大臣

続古今恋
道さへてあとは深きしのふの山あさくおもひを知人もなし

定家

忍ひ思ふ何おもふくのしのふの山霧もしられしいろのみそしれ

寄雲恋といへる心を

高階家成

続拾遺恋一
いはてのみしのふの山の岩かねや何おもはれと頼みそめつゝん

寂蓮法師

新後撰秋上
ときはあまる何れ梢もきこえしを待又は山の時をしるかな

参議公経

同恋
我なかし思ひ出つふの山の松か風にも手枕く色やに出ぬものかは

光俊朝臣

同上
志のふ山岩根のまくらはかは下ゆく水のおとまさるかな

皇后宮

続千載恋
たつねても思ひしのふの山乃ほとゝきす心のおくのなをやしるらむ

兼忠内大臣

同秋下
露時雨いかにみちてか思ふ山木々のしけみのいろにいつらむ

光明峯寺入道前摂政家に千首哥の中

山階入道左大臣

同恋四　亦続後拾遺
恨ても忍ても露我衣はぬれまさりしのふの山の葛の志た風

前大僧正良覚

同雑下
手なれつる心の海も見えやらてしのふの山の岩道求めてん

新千載恋一
流ゆく世の心に松く見てもしらしや思ふの山のかけの谷

典侍親子朝臣

同雑上
うれしさは志のふの山のほとゝきす心のおくになきてかたらふ

源親長

新拾遺恋
もらすへき隙しなけれは思ふ山志のひくかたの谷のしたみつ

右衛門督小宰相

同
思ふ山しけきこれ道ならて尋ぬる人もなきしるし

兼好法師

同
俊栄

人志れぬ思ひしのふの山風に時そともなき露我袖まて

權大納言宣明

同上

此葉にも声をならして我志かの山田のはらしもおきまよふ月の隣

建保二年名所百首

定家

岩根ふしいそや隠る志かの山人はいくのいろを知る年て

貞和二年百首

前大納言為定

同夕

中よりは路乃なきにも法をそて我思ふ山法しき人は奥ある

明魏法師

同

志る人も無をかの山乃奥ふかく心はおくに我思ふもみちそ

前大僧正義尊

同

行すゑは心はれなくさめくいとゝ志かの山わけしこころち

前大僧正滿済

同

主もなき志かの山路は時雨にそ手向ありてものなきされ

後崇

同一

尋ぬる道もしられぬ思ふ山神にいのりて我志る月の成きれ

大二條基成

うちなくる心はおりも見ぬ世にも志かのみ山そ原てはきる

名所百首歌合

後花園院御製

同

都には紅葉もちりはてたるをみちなくの志かの山そ木風なりけり

家隆

人にたにあはぬしかの山こえは帰るにおきてなくまてそふる

建久二年左大将家歌合歌

定家

夫木

志賀の山（藻塩草こさりはかくに）いつさちはいはくにかへしさるのまさやくにしつむなく

藻塩草為家　志賀山の鶯

しかの山こさりははるのかすみにはさるのまさやくにしつるゆく

ゆきてきゝてにはさるこえのひに我をやなかたらしの今もしたふ

海さかなれたあそとなるかなしはし上見しかはしるはなかれ

拾遺集

中務みこ

夫木集

志賀の山霞はうちはるひきて人めしつかにきえてやゆくらん

同

桜花の春やひとしき志賀の山まつにいつもかはらぬ

玉葉後撰集女

皇太后宮大夫俊成

建保三年名所百首

同

順徳院御製

同

なきやまけしの山はなひまさるつねにはるるまちとほしけれ

松原万葉集家隆

正三位家隆

同

志賀の山みちをわけてむかふる雲はなにかゝるまちの海

正三位知家

同

帰る雁花に似しむはちかれ志賀の山よりみちをゆきて

従三位家隆

同
春ゆきし思ふの山に清しいと称て色に志られきぬるな
百首前思絶恋　志のふ山　信実朝
民部卿為家

同
人志れぬ思ひ忍ひし泪ハ志のふの山志るへとなりてそ道芝の露
古て泪百首
隆祐朝臣

同
うへかくぬおもひは色の志た深くしこ志のふの山はなくてもあらし
建長七年顕朝卿家千首歌合寄梨恋
信実朝臣

同
恋ふるまはくるしきあきと世の中にしられし思ふの山なしの花
千五百番
参議雅経

同
岩つゝしやよ月こそほのきにきそしのふの山はかくの一つ
文治六年五社百首照射
皇太后宮大夫俊成

同
ゆふされて小鹿に心をつけ侍なるも思ふの山の嵐を聞つゝそん
従二位家隆

同
妹しきるへや志のふん思ふ心志のひかねてかれくはあのいを
宝治十首歌合忍久恋
山階入道左大臣

同
志のふれは思ふの山はいさとすけいそて思ひの色にそつゐきる
洞院摂政家百首
俊成卿女

はなしや志かの山越てさそひなん後の行の白雲

平政村朝臣

秋風は思ふの山に鳴鹿も人に志らる声やなかりける

文治二年百首

右中納言家隆

志かの山こえて我見の旅いつもあかぬ秋の紅葉をおもひやるかな

元文六年小野之文字合悉悉

従三位家隆

谷川の氷るにつけて思ふ山紅葉ちるさま川の月の静

宝治十首歌合

大納言為家

春なし思ふ山の松に花咲て年経る色は幾年のうら

路見ゆ橋なむ山に桜もしられ志かの山ふもみちさくらねて

家隆

いふはらん思ふ山に行ゑて思ひ入る露けり一葉

為氏

行つかせむ志かの山道をまよひなくちに越る近江をひなき

定家

思ふては思ひけれ山のおもふ山露も時雨もいろをうらむせし

家隆

ちくゆかなしへもつめ春霞志かの山のたもとの木末は

範宗

述懐百首

春深きあやふれ山嵐つしいてねなふ志るきさつろを

康光

志かの山嶺にはくもやちるらん思ふらんはるか谷の名たかき

六百番歌合

兼宗

あかの浦ふ甚なき世をすくさんとなれはいかに山や住家なりつき

隆信

あかの花海さへかくもしのふ思ふ山海きを志のひそめん

信夫里

菅里のしのふみちのおくへまてとけるふたりしけける

藤原滋幹女

後撰

君をのみ思ふの里へゆくものを會津の山のはるけきやなそ

橘為仲朝臣

新古今秋上

ひとやなくしくなるらん思ふかひもなくて思ふの里の秋の夜の月

西行

新勅撰恋一

東路のしのふの里にやすらひてなこその関を越そわつらふ

俊成卿女

いかにせん思ふの里に語らひておもひ入るも露にぬれけさ

為氏

新後撰

たちかへり志のふの里の思ふ事をいはて青月にほのきこえぬ

八條院高倉

続後拾恋一
いかにせむ人にしのふもみちのくの思ひの里にしのふは猶てき
後醍醐院御製

新千載恋一
うくもあり思ひの里にしのひつゝかゝる中にもまつはちきりて
後九条内大臣家歌合秋眺望　しのふの里　陸奥
家隆卿

夫木集
たのめの月乃光もさやけしえやは思ひのさとのゆきゝの路
寛治元年百首
兵部卿隆親

同
いはぬまに露やおくらん人しれす思ひの里乃木くの篠まて
慈鎮

夏かりの月は清みる人の秋ちかきのさとになかめて

同
光台院十二首
中納言定家
時鳥思ひの里にさそはなむまきの戸のゝ有明まつころ

同
正治二年百首歌
権僧正公朝
みちのくの思ひの里乃秋風にわかちきりをもしらつゆまし

同
百首歌　里　玉橋
隆祐朝臣

同
なれひやる昔も遠きみちのくのしのふの里に月はすむちも
家五十首
光台院入道二品親王

同秋風抄
いろ深く染めし思ひの里人も山時雨なくしてもかゝる
光俊

里人も思ひにきえは山吹の花さへ出ていろにいくもえ

信夫森　　森一作杜

藻塩草けふしる　ほとゝきす　下草　なるら　加筆
ちとせ　しられ　しのふのもりつゝく

女有し志のひをゐうにふる侍きるさゝきこゆる
たのみなる侍ゐれは涙のつゆくるゝ　　左衛門督隆房

いはくとも時々ちらしもみちけに志のふの森のつゆそ
中納言則平家の歌合　　よみ人志らす

新勅撰恋二
住里もよそにみゆる時なるもしらくさしらつゝ志のふへ[illegible]

続拾遺恋四
なとのえしるしのふの森の袖のしたを[illegible]杜のとかし　　順徳院御製

新後撰恋一
志のふれは御もしのふの杜の露のたもとにかくれなは　　前関白太政大臣

続後拾遺恋一
ちるかいつしかにもの杜のしたのなかにもひとはなは風のいろやは　　為氏

新拾遺恋一
露しけきしのふのもりやいかはかりそてふかき森のしけき芝草　　義詮

同
志のふしてしのふの森のしたかけにしのひてまたもしのふかな　　法橋[illegible]

ちらさねよ志のふの杜のこのもとに何あふくめの人もこそすれ　尊圓親王

新後拾秋上
なけやなけ志のふの杜のほとゝきすいふとも声のかきりをは　順徳院御製

津らえぬなをこそきかしときは志のふの杜はしくれはゆ　後照念院関白

同秋下
岩つたや志のふの杜の夕時雨いつ秋色に出らん　藤原親房卿

同雑上
偽きしかたのいさつものをこそ何と志のふの杜のなくらん　前中納言為世

涼しさを梢の風にさそはれて志のふの杜は秋や来ぬらん　顕昭

いつしかも志のふの杜も志のふ露もしくはなにかきかさらん　正親

信夫浦

藻塩草　奥州　人見あくしれ　はまのゝうら　きつのかけ
忘るゝ夕くもり　あまのさかり　人しれぬ　はまのゝうらの火

千五百番歌合　栲縄

新古今恋二
うちはへてくるしきものは人目のみ志のふの浦のあまのたく縄　二條院讃岐

哥合しきりにしてかみのさいはひをよしかへしなと

入道前関白

同旅

目にちかきしかすかの浦さひしく浪よりもなれはさへつれなし

焼塩　家隆

新勅撰恋一

人しれすしかすかの浦にやく塩はなにをまさきにたつ煙の中

同

新勅撰恋　続後撰恋

たつ煙やそれとも何に海にしかすかの浦は海士のもしほ火

源兼氏

続古今恋

人めなきしかすかの浦にあくかれのみの下にもさそへ涙川なくなる

大納言経継

続後撰恋一

人しれす思ひは浦にすむ浪の名のみたちへしあすはひやりさし

しるせとや修理の浦は峯の煙はあすもひさしゆふなれさらと

式部卿恒明親王

いかにせん思ひの外に奥津風ふきくる煙のいろにいてぬるは

正三位隆教

新拾遺恋一

人しらぬしかすかの浦にうきてあすはひとつなるとみはさらなれて

邦世親王

建長二年哥合　修理なるらん　陸奥

雅光卿

あまのたく塩焼浪に打まかせ修理なるらん海士のすてく舟は

百首哥合の首中

藤原為顕

人志れす志のふの浦ちかく友にしつる我身なりけり
はかなき人に逢見しこと

法印定為

ぬき摘なくても忍ふの浦ちかみ波にぞぬれしけさやかなりぬらん

後鳥羽院

同集
きのふまて信夫の浦の秋の風今はさひしき波のおとかな

信夫原　或作信夫河原

歌枕裏書云今按考万葉第七曰問答
佐保河尓鳴成智鳥何師鴨川原思努比益

河上

人社者意保意尓毛言曰我幾許師奴布川原乎標結勿謹

此哥只奇河原戀慕之心欤歌枕原部立之条如何但家隆卿八條院高倉里哥以此本歌詠標結可思之

洞院摂政家百首しのふ恋といふ題を

家隆

続古今恋二
人めのみしのふの原にゆふしめの心のうちに結ふやたれかまの手なる

夫木集
御集原上云露

志のふのゝそて

信実

新勅撰秋上
後一條入道関白
忠家入道むすめ
いつとなく露やをくらんみちのくのしのぶの原に秋風ぞふく

百首歌奉りし時しのぶに恋
源守法親王

新後拾遺恋一
名取川末になかれて陸奥のしのぶの原にきえぬ露かな

信夫伏拜
今福鳩河南坂也前篇信夫河原乃是也 見下
萬葉集哥

みちのくのしのぶのわたり伏おきてぬるきはあやなしあちきなくもある
信實朝臣

古歌集中問答詠鳥部 童公
人社者意保意尓毛言目我幾許師奴布川
原守標結勿謹

信夫渡口
みちのくへまかりけるにしのぶのわたりにて
そのかみしのぶのわたりをたづねてもかれにしその人なくもがな

後拾遺雑一
あさぢふはいかれるやどのさびしきに人めもかれしさとぞかなしき
能因法師

信夫岡 河内 或武藏

草むらにかくれし

新古今 秋上

何ゆゑをしのぶの里のあれまくも猶ゆかしくや露けかるらん　　俊恵法師

堀川百首しのぶにおもふ　　みちのく

前斎宮河内

夫木集

しのぶとも知らぬ人なき波のうへやしのぶの杉のかさくは(?)流しもせ　　登蓮法師

曰

なかれてをしのぶの里の岩清水いはでおもひのいろをしらなん

忍ぶ恋　　源季広

曰

人目のみしのぶの里に住みながら何をかくさんいつみ(?)かくれなし　　慈鎮

今更にしのぶの里に秋くればはてなくみだれゆくしのぶ(?)にもなき

信夫瀑布

弘長元年百首しのぶの滝　　陸奥

後九条内大臣

入しらぬ道もさきたつ涙かなしのぶの山の滝の白糸(?)なかるゝ年

信夫文字摺

土人言文字摺古今在端上川上山口村小倉寺畔往昔好事者磨麥葉于石上則見所思之人影近郊麥隴為之就之就蕪故農夫悪之厭例其石而埋于土中其石猶存焉

有安西県者来折之産也説文字揩石曰其石東西一丈一尺六寸南北六尺九寸七分地上高南畔一尺七寸北邊六尺二寸前大守堀田豆州君招僧麟祥院于落妙心寺其僧名蟄雲記之以立石其記曰陸奥国信夫郡毛知須利石始称其名不知何時其説亦未詳也只恐萬世之後人不知其斯石故表而立碑於石傍云元禄九年丙子夏五月仲旬福嶋大守紀正虎表焉右碑詞文字頗拙義理不通況亦其事實不分明字惜哉今博恰者記之則識古之遠猶視今之近也豈不遺憾耶

假名字例第四曰忍文字揩古書作鈙揩（鈙巨金切音鈙同持止也）説者未詳也みちのくの忍ふもちすりとハ以つ源融公なりともちすりも信夫の郡なる文字摺するなる乱文字摺とかきならひとも以て語ちれとも唯文ら此典地に摺しといへん歟

哥林良材曰しのふもちすりのこと
みちのく乃忍ふもちすり誰ゆへにみたれんと思ふ我ならなくに

右陸奥の信夫郡にも能ある事とて数多ことごと
しるしやうにさとしくるものを信夫にちまう
けにいふなるし

伴せおもう
春日野は若菜摘むとみえ思ふに於ては似たらずともに
右武蔵野はいかにもさ知らしかれいひなしてしかれ
けしきも春日は里までも見えてなん我は春日野
は若菜とつけ侍るもむさしはさもふるきやさき
ものおもひも古きにも春日野と共に一首ともおもふ
勝となる可し

判政

おもふともいはでしのぶのすりころもなくらは内に乱れ忍ふの衣

宗雅

みちのくの忍ふもちすりと忍ひつゝ色にも出し乱れぬるかな

政輔

きのふけふ思ふのみこそ誰ならん何は庭残しのぶれぬる
右此哥はことに後右大臣の末子なりし中納言為相
卿などもみなみな春日の宗の能にさきちかくしてその人々
いひけるにも是かくきこえきゝける中にもおもなき助
卿が子清の侍従基家のかの難あるをいひしかば
にも有る所なくて又これはおもなき事次第に目

花鏡つもりへいひやりけるなるとまへの世にもなかし
きとりけるといひてきかにきこゆるとしたん袖中抄第九巻に
文字すり
みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにし我ならなくに
顕昭云しのぶもちずりとは陸奥の信夫郡に
いふ所みだれたるすりとてちぐさにみだるゝやうにすりたるや
考伴鐘抄云昔おとこうひかうぶりして
ならの京春日のさとにしるよしして狩にい
にけりその里にいとなまめいたる女はらからすみ
けりこのおとこかいまみてけりおもほえずふる
さとにいとはしたなくてありければ心ちまどひ
にけりおとこのきたりけるかりぎぬのすそをきりて
て歌をかきてやるそのおとこしのぶずりのかり
ぎぬをなんきたりける
春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれかぎりしられず
となんおひつきていひやりけるついでおもしろ
きことゝもやおもひけん
みちのくのしのぶもぢずり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくに
といふ歌の心ばへなりむかし人はかくいちはやきみや
びをなんしける私云むかし男の世系とていひ

なりたりしかに見ちて来り姫ともゆへの右京
来り姫の里なれハしるをいへるむかしの御ちてすゑ
なれハこの御むかしの姫ちとなりてやさしきことにて候
独りその院の御前にまいりて来り姫といへるものつら
をよはいゑし
其名称はあたる也めにはちかすかたしてみちの里の修史
頭めそこれにてすゝ春にもおとりはかりし兆いひ
侍つへ多ゝ頭云の名をやつしみちのさかりの右京を
つきて太夫とをなりし遍照寺の御僧正の御時にもすへ
移らくいひしかと四年すきの後切にもかくて僧帥大僧

此清和院の御僧正の御事に孫たちにおはしくいひ侍りし
かは世人のみな奥さし此ほとをなやまにおもはく
う侍しかりにや
童常ね云もちひたるとちてみちの本の修理亮
にて世をのかれたりしうちちからつくされけりしくさて
其後遍照寺の院にすみれの御僧正にくいひて
和云たん年にも残れ朱花れ左京大夫修範公
なれにいさなりかく那山の寺免くるを侍りし
に遍照寺に隠く侍しかは此の母尾御僧正
みな此僧のほとりまのゆくさの御まへるの御事とぞある

う號く侍らさむとしけるにそのかつらまきを取りてさ
めくらしてさしけるを侍りし中納言左大臣とるなも
春日に侍りくるを給し侍りける人しのふることもの
たなきを拾もしのふもちすりを心中にあそふ御衣
綾の子法綾のしのふにもりのかりてしのふもちすり
きるゝなれはあるみちのくの左京に花日記
絹のりしく
時見し志のふもちすれ誰ゆゑにみたれ初めにし我ならなくに
世にまことに木しきるといふ出羽の國にてひとつ
東史曰基衡贈忍文字摺千端千佛工雲慶

云
河原左大臣
みちのくのしのふもちすり誰ゆゑにみたれそめにし我ならなくに
嵯峨院御時百首哥奉りける時恋のうたとてよめる
あふことをしのふみち侍る　　右中納言道房
千載
恋
かしこき文摺の原のしのふ露にしのふもちすりかゝる袖なき
容はまかぬ露のまにしのふにあふことをしのひ侍りける
右大臣道長
同
旅
しのふ衣ふかく露しけき志のふもちすりのあはれなる
従三位敦政

同恋一
おもへともいはてしのふのすりころもこゝろの内にみたれぬるかな
寂然法師

みちのくのしのふもちすりしのひつゝいろにはいてしみたれもそする
左大臣家歌合に上臈よみ侍りけるに
侍りし藤原範綱か子清綱か人つかへ侍りしも
きこれしのふにまかりしに精なきを歎くを聞侍りて
なれまさるをおもしくてくれはまるの日記からそ
つかはしけるをよ法仏侍る
左京大夫顕輔

千載雑上
いかならんしのふもちすりたれゆへにみたれしこゝろのしのふもちすりと
新後拾遺恋
君ゆへにみたれ初ぬるしのふをやいかにしのふのしのふもちすり
後法性寺入道

千五百番歌合
中納言兼宗
同
いはてしもおもひみたれてくすつきつれなき人をしのふもちすり
藤原尹伝

同百首
あはれなるものをしのふのすりころもみたれぬやなにゝかあるらん
新後拾遺恋
色みえぬ思ひやしのふのすりころもおもひみたるゝ秋の白露
常盤井入道前太政大臣

同
しのふしのふしれぬおもひのみたれてかしこにしのふもちすり
後光厳院御製

御製

続後拾遺 雑之
いにしへのまゝにみゆるも色かへてつゝしみなかすゝすみ…

藤原為経

新後拾遺 雑
あはれ我捨しうき身のうきことしあらはいまはなにをか思ふ事なき

頓阿法師

玄本野には霧たちかくす秋萩乃色あるゝは思ふ事すも

後拾遺 雑部

定家

みちのくの志のふもちすりみたれつゝ色にも恋ぬ思ひそめてき

光明峯寺入道摂政家歌合 紀路乃恋

従二位家隆

玉葉
志のひつゝ志のふの衣ぬきかけて人目はゝかるゝ袖の色かな

家集恋歌中

同
移にけり心の色をそれとしらぬ我のみ思ふの涙なるらむ

久安百首恋歌 所収 顕昭

同
人志れす涙そいろにみちのくの信夫のもちすりなみたなりけり

参議雅経

六百番歌合

隆信

同
きぬ/\に移ろひゆかむ衣手の志のふにかへしのほるらむ

磐手信夫 是亦古来相連續之詞未詳其有何所而併両地干一事讀了

右大将頼朝

新古今 雑下
みちのくのいはてしのふはえそしらぬかきつくしてよつほのいしふみ

内大臣

続千載恋一
人志れぬ袖もなきやみちのくのしのふの山の下つゆ

大納言師氏

続後拾遺恋
おもひ路のほとゝ瀬にみちのくのしのふの浦に捨てし哉

信夫鷹 下哥共見于前篇照以鷹類集載于此

人くゝ年を待てきる百夜は中に

中務卿親王

続古今恋一
みちのくの信夫の鷹は手放れぬかとれも志らしあらはれなんを

能因法師

陸奥のしのふにまよふを手にすゑてあたちの原をゆくは誰そも

建久二年左大将家哥合鷹部

定家

信夫山ゆきちらくにかりしれての羽音や人にしらるらし

佐藤莊司館

上飯坂村西在天王寺中野村之間称大鳥城郷人謂之丸山城有寺号瑠璃山吉祥院醫王寺修禪宗莊司父子古墓牌子有之奥将院鉄山宗真莊司元治墓銘也長五尺廣一尺七寸厚一尺光明院玉華昌蓮大婦人墓也長五尺廣二尺六寸厚五寸傍有元暦

元年三月十八日字請光院剣勝忠信忠信（衍字歟）
墓也尺寸相同寺中藏義経笈弁慶親筆大
般若一巻唐鏡燕子等
或曰荘司墓在出羽白岩田間有寺号弥
勒寺後山謂之丸山城
夫中華之有謚法也以其文字而千載之
後分明考其人一生之心術功業可謂的
實嚴明者也本朝欽明帝以降王公大人
士庶凡下化異教是以人之於身後必也
委身于佛氏假手于浮屠於是辛其名号
大乱其字義頗戻其道理併亡其人之心
術功業也尤甚矣夫次信忠信之於仕途
共尽其所使之道致死于至忠児童走卒
亦能知之然見此墓銘卑俚凡俗失之之
中復失其義實可惜哉

憂思山

福島西南有一山郷人称吾妻嶽是乃於和
歌而号憂思山者也

六帖　　赤人

みてもおもひ見えてもおもひ大かたはあかつまにつゝあふおもひの山

六百番歌合　顕昭

わしをあさくしけるなきかのなりもてなしと深くふかきやはすの山

箭筈嶽

在吾妻岳東土湯邑西北

安達郡　三

東史曰藤基衡贈安達絹千匹於佛匠雲慶云

安達

大哥所

みちのくのあたちのまゆみわかひかはすゑさへよりこしのひしのひに

い自絹筆をよみ入れ　源縁法師

みちのくのあたちの絹はなかきともきぬふはかりのみはまてちさき　ぬイ

按往古良馬出于此地而備貢献者可見

小一條右大将になりきこえまふよしよみ侍

つくし侍りけるときよめる　　源重之

みちのくのあたちのまゆみひくやとてきみにわかみをまかせつるかな

按藤忠平乃昭宣公基経子實頼師輔父也醍醐帝延長五年奉勅上延喜式五十巻村上帝天暦三年正月辞大政大臣致仕八月薨年七十歳贈正一位封信濃侯諡貞信公号小一條或称批把左大臣是也

このまへにて侍りける人みちのくにゝまかりけるに

弓をはなむけにつかはすとてよめる

藤原実方朝臣

日新玉

みちのくのあたちのまゆみわかひかはすゑさへよりこしのひ〳〵に

按往時此郷出良弓用之邦国者也

宇治前太政大臣家にて川よりみちのくへまかりける

なにをと　　堀河太大臣

采女ゆる人にいはれたるやみちのくのあたちのまゆみをきのまゆみをさきや

寛治百首うたにすゝきをよめる時よめる

続後拾遺恋三

後深草院弁内侍

みちのくのあたちのまゆみ末はらにいかにせよとかひくてひくらん

三条院女蔵人左近

風雅集
是やこの行もかへるも今我は出ていくらむしらぬ関

光明峯寺入道前摂政家十首歌合おなし心を
後堀河院民部卿典侍

新拾遺集
人をいさ逢坂の関をこえしは何の恵をいつまての身

中園入道前太政大臣

旧
年のなかく契なるとしもたのまれし逢坂の関のゆくへしらすも

法印守遍

新続古今集
うれしさや七十にみちぬくの行くをふち海山みまちあふ坂の関

藤原頼氏

いまとしてあふさかやまのこえくもかへるゆく身の袖のなみたか

名所百首　定家卿

梓なさる霧やこのまいくら葉あふさかのまゆをまちち関の杉

同　順徳院御製

霧はけさゆくらみちはちたてゝ秋の色をなにとかもせん

最勝四天王院名所御障子　阿ち原

従二位家隆

将人は行ちみちもしらぬ末とをみやありしうらの行きのかみみちて

安達原野　一作阿立原

阿武隈上流経此原野而過其河東謂之安達原其地有巨石長一丈石面可六七尺士

人呼曰白檀相傳義家朝臣征東夷時既木
殺而登石上射而殪夷賊々徒甚畏之去今
殺痕存于石上
按白檀卿老説如斯恠其妄説若実然則
右大臣従三位光俊等詠紅葉零落之句
可謂非乎蓋曩昔之喬木化為石乎外国
亦有此類矣且夫詳哥句及実方辨内侍
左近典侍等所言則真為郷里所出之良
弓焉想夫白檀亦造弓之木乎未可知俟
識者可弁之

石東南卯三足趾于原上義家射于石上従
者走拾其矢之痕也一歩阻十六七町曰三
歩原

藻塩草　阿こちか原　[illegible]　くろ河の[illegible]こすゑ
まゆみ　紅葉　[illegible]　志くれ　兼
よみ人志らす

拾遺集四
みちのくの安達か原の志らまゆみ心こそひけ[illegible]
みちのくの阿たちか原の[illegible]女の九月計の
きりしける

新古今集
木[illegible]ひやる心は村雲志くれつゝ阿たちか原に紅葉志ぬらん

おなし百首歌奉りける時　　侍従三位為子

名残なきを河ちかき宿は霜枯のはらにかれゆく淋しけれ

題しらす　　経円法師

みちのくの信夫の里をみちのくの安達の原を行くへ誰か

最勝四天王院障子に安達原　　定家

時雨ゆく河ちかき宿の露まても果なき秋のおもかけ

名所百首歌合　　家隆

武蔵野や河ちかき宿の暮れぬとも月のかけさへ思ふの事

題しらす　　後徳大寺左大臣

安達野のはらの露の袖をそふ秋のはてまて

最勝四天王院名所障子　　一條前関白

如願法師

河ちかき秋の秋風もさむく露置くしの秋なくらん

久安百首　　前参議親隆

安達野の原のかれふすほのゆる露やちかき秋にみゆらん

建保三年名所百首　　河ちかき　　三位忠宣

河ちかき秋も高嶺の物思ふ旅人の月やちかき秋のゆふくれ

百首ノ哥　寂蓮法師

（日秋）さしなくあたちの原に紅葉して[illegible]の中川

建保三年名所百首ノ哥　正三位家衡

時雨行くあたちの原の[illegible]

夫木　顕昭法師

[illegible]

新撰六帖　光俊朝臣

[illegible]

黒塚

安達原上有二堆塚往昔那智東光坊阿闍梨祐慶者抖擻假宿于此地主婦縁焉深更菜薪山中祐慶怪之時其亡而見房中積骸如山驚而出走追之急祐慶以法術脫去其塚猶存居宅址也

みちのくに名とりの郡黒塚といふ所に重之か妹あまたありとききていひつかはしける　平兼盛

拾遺雑下
みちのくのあたちの原の黒塚に鬼こもれりときくはまことか

大和物語にも[illegible]

このみなの女になしける人具して行にいふやう

侍りけるその娘とかふ松原をすぐるとき

みちのくの安達か原の黒塚に鬼こもれりときくは誠か

となんいひおくりけるを かくてそのむすめのもとへ

いひおこせけれは親まていはへりつつ東人あまたいまして

うたなとよみおこせていひけるに東人しひていひやりける

山ふかきみなほれけく

むまをとめやとりとどめつなくに井ての岩にしらぬめさしも

はていひかくすこうくるみなりしものをゆといふる時

恒忠かきみ女まへなるをその折いふに黒塚か歌

あらしなりけるを

北国越しに雲のかかる浅間のたけの峰には炎こゆるかなし

まうく百首　従二位家隆

或本

みちのくのちかの塩竈見るしおかまのかたあまつりて安達か原の黒塚にありときく人をいつはけく

新六帖　為家

日

安達原の里おほつかなし松か根を枕にてみちのく紛らはしけるや

百首歌　寂蓮法師

あさまたき山田の黒塚に安達のまゆみ霞そかかる

吾田夏良嶺　一作吾田多良野

是乃二本松西嶺也土人称之二本松岳夏

六月望日祭之郷黨守夜終霄群集未詳祭
何神也
歌枕名寄云安多良嶺範兼郷類聚部野
立之或抄云嶺也云云
藻塩草十七阿たゝら嶺　いつきう　まゆみか
続国歌枕云あたゝら祢名之神社也
寄弓
陸奥之吾田多良真弓著絲而引者香人之
吾乎事将成
陸奥国相聞往来哥
安太多良乃祢尓布須思之能安里都々毛
安礼波伊多良牟祢度奈佐利曽祢
譬喩歌
美知乃久能安太多良末由美波自伎於伎
氐西良思馬伎那婆都良波可馬可毛

安積郡延喜式万葉集作安積香或作朝香新古今序作浅香今従日本紀

四十四代元正帝養老二年五月己未割安積等五郡置石背国

四十八代称徳帝神護景雲三年三月辛巳陸奥国安積郡人外従七位下文部直継足賜姓阿部安積臣

四十九代光仁帝宝亀三年六月丙申陸奥国安積郡人文部継守等十三人賜姓阿部安積臣

五十代桓武帝延暦十年九月癸亥陸奥国安積郡大領外正八位上阿部安積臣継守賜外従五位下以進軍粮也

五十四代仁明帝承和十年十一月庚子陸奥国安積郡百姓外少初位下狛造子押麻呂戸一烟改姓為陸奥安達連

神名帳安積郡三座大一座小二座宇奈己呂和氣神社名神大飯豊和氣神社隠津嶋神社

五十六代清和帝貞観十一年三月庚午授

陸奥国従五位上宇奈己呂別神正五位下
同十二年十二月丙戌陸奥国安積郡人矢田部今継大部清吉等十七人賜姓阿部陸奥臣

安積山

日和田以北有高山其山形如一圓丘嶺上有一樹青松臨山頭則近郷入于吟眸是乃安積山也

八雲御抄云安積山尾張[illegible]伊勢国

亦万葉注[illegible]後撰[illegible]阿さか[illegible]
以一首[illegible]阿さかやま[illegible]後撰[illegible]
[illegible]新古今[illegible]山の井[illegible]阿さ[illegible]
山なと[illegible]
万葉集 山部 安積山 陸奥

有由緒雑歌（緒一作縁）
安積香山影副所見山井之浅心乎吾念莫国
（此間有国字作国司字則意尤備焉）
右歌傳云葛城王遣于陸奥国之時（八雲御抄）司祇承緩怠異甚於

眡王意不悦怒色顯面雖設飮饌不肯宴樂於是有前采女風流娘子左手捧觴右手持水撃之王膝而詠其哥尓乃王意解脫樂終日

甚矣好色之能移人歌詠之能起人也諸兄奉勅而遠游焉可謂嘉賓上客之可敬者也不可不馳驅奔走然国司及緩急上以輕王命下以謾縉紳甚犯上之罪悪不可免焉諸兄之暴怒宜哉於是始覺其不恭而出一女子以解憤意于一觴一詠之間以謝罪可謂克成得其術矣其事雖似元出乎從容然非徒以尤態諛容而取其媚悦其旨趣出于情欲难止者而以漫游涵泳述其志是亦不幾樂而不淫者乎於是諸兄亦至憤怒忽消融無些子之凝滞乎肚裏者所以実為和哥之德也故得其性情之正者男女自然之本心也是以後世貴難波津之詠及此歌而擬奇学之父母其志意之所寓宜乎哉

詠歌本記曰日本武皇子伐日高見国至恐

生国昔国首首奉饗而為事踈大王不喜已
欲物餘采女春姫知無為而妓乃進取奉觴
奉上文酒調曲誦之大王絆倩致平均
采女春姫
浅香山影副見若鳥山之井之浅慶者人乎
惟生物欲只
按古来以此歌為橘諸兄東行貶采女之
所詠焉於古今序亦俞自是以来和哥者
流及天下後世公然解其事實毋其和哥
也然今載之本記而以日本武尊而易葛
城王以采女春姫而為奉觴女其事実其
詠歌則同而其人其名則異於是乎蒙潜
惑焉耳
市原王歌一首
万葉八
待貶而落鐘礼能雨令零収朝香山之将黄
変
按古哥載新拾遺秋部令零収作雨濺為
讀人不知
みえす古今集序に浅香山のことはゝ采女の
たはふれよりよみて[illegible]みちのくへ

陸奥の国へつかはしける時国のつかさことおろそかなりとて
もてまうけなとしたりけれとすさましかりけれは
うねめなりける女のかはらけとりてよめるなり
此歌にてそ王のきみの心とけにけると
浅香山影さへ見ゆる山の井のあさき心を人をおもふものかは
万葉集二十八
阿さか山影さへ見ゆる山の井のあさき心をわかおもはなくに
葛城王のみちのくにへつかはされける時国の祗承
の緩怠のはなはたしかりけれは王いかれる気色
に見えけるにさきの采女なりし者盃をさゝけて此哥

をよみてたてまつりけれは王の御心とけてたのしみあそひき
此ハ古今假名序阿さかやまの詞采女のたはふれ
よりよみてといへるなりまた大和物語の説には陸奥山井
大納言の姫を内舎人なりけるものぬすみてみちのくに安
積郡阿さかやまにいほりて家をつくりすまひて
男のいてゝものを求てくるとてあさくみ出て二三日
こさりけれは待わひて出てやまの井にかけを
見れはありしかたちにもあらすあやしくなりけれは
しけなるを見てはつかしさにこのうたを木にかきつけて
庵にかへりて死にけり男きたりて見てかなしみていさまし

にごりにしやまの井なるらんとおもふにもあはれ小
船のよりし世の中ことさらに思ひぬる物の葉の
露こそはかなき世なれ
世をそむきし人の花の袖にはいとゞあはれさふかきを
すてゝしたふ思ひも深かりけるにあはれにいとゞ悲しく
うみ隠るゝなれ

蓮生法師

古へは思ふもよしやはかなく消えし山井の影の浮世なりけり

按蓮生乃宇都宮弥三郎逃世而為浮図
其於仕官高車駟馬之栄旗旄前騎卒
擁後夾道之人相与騈肩累迹瞻望咨嗟
其栄達者亦柳幾許哉今取路于往日之
江山也顧已顔色惟悴形容枯槁其所著
者草鞋竹杖孤立孤行実所以不勝人情
者也於是乎興無窮之感慨生若干之旧
懐焉役之入浮屠雖未詳其由至取世之
変化人間之盛衰則尽寓諸一篇之詠焉
故俾人読之則復発無限之哀情矣可不
悲痛哉

読古今雅下

前内大臣

八雲たつ道も源氏をたづさふ山たづさへし人のおもひいづらん

為氏

續古今秋上
秋をまよいつてつ人まし跡そみえてあさかの山の井のかけ
人こそすまんさける

續後拾遺秋　一作和泉御製
浅香山むらの雲の風をいたみ空ゆく月もなかはし
すまし庭の月よりみ月も影井の中に　光孝天皇御製

僧正榮海

新千載雜中
むかしこそのみちのおくなるあさか山深き心をいつくにもまし

浅香山

あさかやま霞の谷に風寒きまのあさしよきかもし

歌枕曰今按云霞谷所名歟可詳

曾根好忠

夫木集
浅ましや安積の山のはらくらむ忘れなくてしみえしもいつかの秋

順徳院百首　中務内侍

あさかやま浅きなかのみ山の井の影さへみゆるよるの月

仁安二年哥合　常陸丸

いつなれは浅香の山の井の浅からぬみちのくもみちしあれは

安積里

堀河百首
小板井にねすてにくるしみちのくの浅香の里の旅衣して来る

歌枕曰此哥金葉沼云云　堀川百首一本

安積里云云　仍里載之

安積沼

在日和田西去安積山西南二里餘甚池塘廣二町余如今不生菰蒲却生蓮者多

宗久紀行に白川をも越ゆるの西へなく〱行は
やかて雲なる見えぬるをつみちかくなりしはあさかの沼
をこえて中将実方朝臣下られける時はあやめふく日なりけるに
あやめ見えなかりけるをたつねけれは此あたりにはあやめなき
かはれはいつれをとかなしはせ(?)なりとてあさかの川
ぬまのぬまくさのへはらしをかつみへとてあるよしを覚侍
七年都芳川院の根合の後藤原孝兼か

哥にはやさくさいはふにもをゆくなくつき根のいはそ
はさうの沼に生をる葦むなるに紫雲にもはかなや
れとも月ぬるえんにのほしかは生きたるをいへ人のかほ
しに當國にはやめのなきれはいてされたるこみ
中将の君へてこれしかは何にあやめもさかしめ志
川のあさ沼にちいふらみ部のおなしあやめ沼はぬまくさ
あさきとそかつみをぬかせられけるなとなれは
ぬまきはらへきるとかつみを待しかはけにもけるまも
待つまやしさかれしつけ待るとゐ

萬葉四中臣女贈家持哥作花勝見

娘子部四 咲沢二生流花勝見都毛不知戀
裳摺可聞

八雲御抄ニ花筐に經にみちのく國にかつみとも
いふ也かつみとも云なへし浜に生ける也
かつみといふハ花かつみ女ハしやうぶを
陸奥にて菖蒲なきにかつみをふきける
事なりと

藻塩草菖蒲ニ附花かつみ五月五日奥州にてハ菖蒲
をはしらぬにてかつみをふきけるなりとこれをかつみふき
といふなりと昔もみちのくにてはやかんなりとし

爰なりと陸奥安積の沼にありと
云ふ奥州にかくいふなりと云ハかつみ草
ともいふなりと或かつみといひしはかつみの
或るきといふ説ありといへり
河光判
世に名残卜五日のかつみをふくかつみ人いとく橘の御
陸奥に於て奇みのかつみを五月五日菖蒲に
みちのくにをふきたれハかつみしてかつみをとふその時
よりは云此國の世にしもとふ菖蒲をかつみ
かつみといふ也つかつミを花かつみのみちのく

もゝ時きふち、かやうんぬくおもをそふつ種くぬ令すれ
傳ふる説ハ此玉のち志やりぬなまよりもとらし
傳ふるの時さうしハ安積の沼のむらつきれはいふもの
かつハ拾れをぬけれは傳つさしらるこらくぬ武拾
見ゆる傳なるとは、いひ出も歌中私のみさらちやいふハ
前に方よ歌にならし
故事談曰従五位上傳菖蒲五月五日之料
ちあなしりとらみかけてをぬつれきうるの渡
玉るめそみとぬ歌
新撰隂陽書云五月可葺水草云

袖中抄第四かつみ　顕昭
みちのくの安積の沼のはなかつみかつみる人の恋しきや東路
能因うた枕云かつみとはこもをいふなりともとく
なりけれはいふ昔清輔云かつみとはこもをいつあさかのぬまを
いふなるをかつみのものさまはみなもさかりにをつくりけるひ
てのかわるゝ伊勢に侍しを綾範はいつかさかりくに
みちのくのこもをうつすはいつはなかつみと五月五日
もくつのをのみ阿やめをハあやめかつみぬ顕昭は
安もをわくなるを後玉のち世うし志やしふの
なりけるきるしも拾うけそまるしものれち阿さう

然説ニハ何や多くをしるへろうと思ひうるかなとも中川極し
私云故六条左兵衛佐の申されしもさる事なる為仲
か任肥後守出立ちてうきを植る事ふ
しけるみちのくにて菖蒲なしと五月るよは
此川ニ蒔きとてすゝきをなまゆくいはれなら
なると西郡芳門院の根合ニ左も若々しふん
菖蒲草引きもてふくもし私程のいへ浅香の沼ニせらん
此方せる歌しても朽ぬなりぬるまきと後拾遺入集ふ
うちぬるとも引ちり催ゟ白泥にちを左右もく
陸奥浅香沼の陸奥ニ京まつと一月然何れなるとふの

逢ふるこす事の門然も申しぬるハ菖楼ひん歟
されし此歌をもつると書れとも判者もたた前ハ何さう
然浪にまきこゑ根をハ川にし光さゆくなりし陸
まうにすきの此らん地ちれともすゝうくこと免
記されハ持中にて判ちふかうた人能か此歌
陸奥菖蒲といふ歌をなくてふ出来歌
童蒙抄云何のまの風俗ニもなかつまともさつまし拾
いつれるとせかしいかや多なりられは五月ある
みちのつく我とらみかつまをふくなると橘為仲
任ニさつまを始記されハ猪させちらみみをこなひ

てめのきさきる左廂にてものを見してはしり入ぬれハ
年老たるきさきのとゐのもとにめのよそにて
かゝるかきせさせたまひけるおほいまうちきみ中将の
次第に次第菖蒲やはかりなくさらにきこえあはれは次第に
かはりもをとりてめくみあつきよしはかりしかれハ手はら
うく候りなるとくはなつまのかたなるをかへりかれハ
為仲たちかくりかみゝなりしとおほしかりけれはさ一つまさるを
されハ是等の中将の時かしこくならむほしきれ云
彼是よりかへりてめきかいへるはりなるを許れハ作
まゐらせ年ふれともをとうちきとみは彼にかりをや

をはくらゝみぬきたはしきその後かくとしかありけるや
三月五日次第にみゆるかかりておもはれち菖蒲をそ女紀
らへけるなるを見ちたる同卿師経朝臣次第せんなるを
陸奥守よりみゆる下向せるん成ると住る程可侍く
此は三ぬきをとかへりきさこそまよひてなりして筆房
うけたまはり候しらは中将ちみちみくの方にく奇特
入舞みるの中将みゆつくたはりの云みちみく中将
さらんな程ち志のめなくかくへうさうは次第の事をそ
女けとも中されきん侍もよはかいて金吾将軍の
合戦もあるく五十番あくつかまつしきをいはせ

にこそ遊ぶらめ夢に来ぬる松が浦の名をなにとて
ひきかへしけるにや京に上りてまことしやかにきえし
奇異しうつつにはかへらうしとてなくなりし
をみなへしさく沢に生ふるもうつ花かつみ思ひ出る事
信濃歌会にみちのつくしたは河しみたなきといふかさ
りのこるなとといふもいへり萬葉集にいへるはかつ
みいふはるかの人の涙そそくといふに
るかたしまつ稀なれはかつ見る人をこひ
う日かいふきもこれにはかるかに見えねは
昭和の歌にいはしるもかつらかはしかつみと

といふ河しあさかの沼にかつみはさきつれ

ちと点日

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人にこひやわたらむ　よみ人しらす
萬葉集もかつみといへるもかつ見る人をこひやわたらむとかつみとはいへは
うへにはかつみといふなり
あさかのうらもかつみの山も名なりしていかにもこれをよ
みちのくへ　藤原範永

続拾遺

五月雨は見えし小笹の原もなしあさかの沼の心地のみして
郁芳門院根合にかつみをよみ侍りける
藤原孝善

金玉に不見
いやしき草川よりも絶えぬのいくて沫香の涙めをけ寐
極てす沫雲二郎芳門院根合に水ひき入つ手
みおしし根とし作に根倚子か出入年古作に
揚戸のあやをし似菖蒲すのに根とし根を長菖蒲
根も不通丈なりと前作るも根ち杜若な
りとして
百首に弁中に猿當に方ろをよめる
参議師頼
国雑上
水草ぬなはは出ずしみちのくの沫香の涙のなみしてみるも
夫木集堀河院御時百首に方ちおかみをえ家集

云みちのくのあ猿の涙の色をたりし京あさく千年
てはすか流つりし色紀も大納言師頼卿の所と
右哥載前篇里下拠金葉沼説重收于
此
新古今文
宮猿四天王院の障子に沫香のなみに方ろ涙
雅経
野への草沫香の涙や刈草のかれるまにはたえきる渡の事
新古今文
解白ちた大臣家百首によみ人出
今上御製
続古今云
秋をは沫香の涙おもへてやつのなつるも称ての出るし寐

同
うしとてもし和哥の浦には名にめかりしあし深き江には絶えて
定家
百首歌奉りける時浦雀
為氏
続千載
刈て和哥の浦の葦わけつみてもちる葉なるされを
難波しまて
権中納言公雄
同集之
花ならぬかひ見えて七拾年の手ならてあ和哥の浦のいさ花ころは
源行能朝臣
続後拾遺集之
むかしより聞こし見る人のありける浦の和哥の浦に我もいでましき
一 慈寺北中小
賀茂季久

新続古今集
和哥の浦に深き心をしみ(?)よするなみのうね(?)
名所百首
順徳院御製
人ならぬ和哥の浦に為る(?)かつてなれにきつやちてな年
同
定家朝臣
いつかしも和哥の浦にせよ(?)きく草葉にそつきて鶴の洞(?)
同
家隆朝臣
松をぬらく(?)和歌の人よりさす浦の末にけるかさ
建保二年(?)通光内大臣家歌合
定家
ぬれて流和哥の浦に寄る(?)さつれなき我(?)ちする

かつみ草安積の沼に風吹ハ八重に里人へ雑の係なるな
後鳥羽院

夫木
君かためかつみしほかのみちのくの浅香の沼よかれて久しき
能因法師

夫木集
後鳥羽院

まこも刈浅香の沼に浮きして河みの下葉[illegible]なるも

六帖
名に高き浅香の沼は玉藻川ハ絶えぬる家も絶えし

哥枕云右詠安積沼于常州可怪

村上天皇御時国々名高き所々を御屏風に絵かゝせ給ひて
ひさこうみ浦
なかいその浦
信明

夫木集　[illegible]
花かつみかつみる人の心さへ浅香の沼にならひぬるしき
御屏風　ひさこうみ浦うきしま
忠見

夫木集
月やとる浅香の沼は氷みつらむも秋のなかくなりぬらん
大入道殿御賀に御屏風　ひさこうみ浦　はつきりの　しま　まへの杉山
恵慶

夫木集
浪えても氷にとちし冬よりの山藤とても絶やしなん
みちのくの浅香の沼の[illegible]にしのふるもとも[illegible]

人やちかくなりぬらん
新古集にも 女御加賀 少将
同じ
元真

新古集
きみがよく袖の浦波影深しけ世々をかさねて名のみぞまさる
順徳院御製
建保二年名所百首

夫木集
しほなれし袖の浦波よするとも袖のうらみはかはらぬをなき
兵衛内侍
陸奥

白
むつのかは道絶えて人のこの袖の浦波思ひわびぬる
貞應二年當座百首名所當座

白
いやましに袖の浦波よるよるはたつとも人のしるらむ
民部卿為家

白
むつのかはみちも絶えて袖の浦風に露や袖の浦にかかる
信實朝臣
題しらす
小大君
人しれず
人しきりにおもひわびぬるいまはまた袖の浦にかけて
堀河百首
紀伊
おもひ出る袖の浦なるものゆゑに涙のかかる
題しらす
よみ人しらず
草枕夢のみちさえく袖の浦のなみのたつ

後堀川百首　大僧正

いかにせん浅香の沼の浅ましやかくる人にいはぬ心を

建保百首下同　家衡

浅くしも思はさりきみ沼の花かつみかつみる色に生ふる思ひの

俊成卿女

契りし我浅香の沼のちらつゝかつみ花色に露そ白らし

為定

たらきをしるをも忘し思ひの那浅香の沼のみつゝなくに

為家

心さし我浅香の沼のみすかしつらつなる花も忘れなむかは

範宗

人心浅香の沼の末にても浅からぬやみきあへくなからん

行家

いかにせん浅香の沼のぬまの川にても濡るゝ袖のなこりは来まて

為清

浅ましく浅かの沼のかき川人を思ひそめて深くみえけれ

安積山その山井に影あれは浅くも袖をぬらしける那

いや見えける志川の菱かさなし安積の沼は雨に夕暮

浅香山井　哥枕作安積井　近江有同名

去安積山西一里余今市村中有小池為廃

井久後人恐失陳迹也以竹籬圍之纔存其
地郷人曰之山井
藻塩草山井不山の井とのみ字のまゝくにとまし山井
あさき事のたとへにいひならはされはあさくもよむと見ゆ
なれはいつ国まして結手の雫ににこるやまの井の
水はいつまても赤あさき岩井　奥州
大和物語ニ昔大納言のむすめいとうつくしう
うつくしくてもちまつるを帝にたてまつらんとかしつきたまふ
けるを殿ちかくつかうまつる内舎人にありけるかいかてか見けむ
此ひめを見てけりいかてそのかたちを見てそ此姫を見てけり

都にしたちいてゝうつろひけるに夜さらなりとて人なかりける
門にさかりもお保えてんやかりつとて安積の里に
しくおほえて家になりてなすへき事れはせちにきこえす
女きさなんとはあれといひきれはかやしなふ
するほといひて出たるをさるありつますにけし
ていくともなくうきいてきてぬきて見えくてるにおきを
影みちみれは我ありしかたちにもあらすいとはつかしくかけく
みるをあさましの野安積山かけさへ見ゆる山の井の
あさくは人を思ふものかはとよみて此木にかきつけて里にいてくもの
なんとそかけ見えにみくえきてかけし月をみゆるを

此むすめハねぬれハ出てありけるをいたきて山に住ん
中ゆおほきさきこんかきゝつけたりけれハかしこ
保しりたるみぬものを世はなれしとりのとも尓
いさめしかのおもろきことにまいりさ計ありけれハくち
いて山の井に影をうつし見れハわかありしかた
ちもなくてあやしきさまになりたりしかゝみ
もなけれハ顔のなりたらんやうもしらて
ありけるに俄に見れハいとおそろしけなる
をいとはつかしと思ひてよみける哥
浅香山影さへ見ゆる山の井のあさくハ人を思ふものかは

とよみて木に書つけていほりにかへりてしにけり
男ものもとめてもてきたりけるにしにて
ふせりけれハいとあさましかりけり山の
井なりける哥を見てかへりきてこれをおもひ
しにゝしてかたはらにふしてしにけるとなん
いひつたへたりなんいへること
橘成季か著聞集に大納言なりける人の
御門へまいらせんとてかしつきける女を
ちかうつかうなりけるのぬすみてみちのくにへおもむき
けるあさかの郡あさかの山に庵結ひて侍ける由有

松井にはあへてさつまつる山かゝりもちゐてやまの井
に寄せうつしてつらにはまとしはあいはしれなるを
わしける新をたちくらうてそとつきけれくこつくり
ほかなしく采女なるわて大和りの御ひ紀せる

按右歌与釆女之所唱歌其詞同而其事
実大異也所挙之亜相亦不知何人且不
詳何代焉古今叙言浅香山之詞出於釆
女之戯言然則往昔有此古事而後釆女
謡所傳世之古調乎公子前者欲想若和
歌本紀説至釆女春姫為日本武尊奉觴

者又可怪可驚

よみ人しらす

山の井のあさき心もおもはぬを陰はかりのみ人の見ゆらん

わひ人の思ひなる人のひさしく消息なかりけれは

つかはしける

紀とものり

後撰集

影さへみえはなれにし山の井はあさきよりまた水やたえにし

平貞文

絶して後事をゆかしみ山の井にほのかはかれ影そ見えぬる

よみ人しらす

山の井の君りしきし年そ

同雑上

あふみのやまさきてもやすく結ふてのいさゝかなるも山の井の水　大宰権帥経通

山の井の岩もる水に影見れは結ひしけふもなかりけるかな

世をのかれて後つれつれなるをりにこそ山をはなれ侍りしを思ひ出て侍りけるよみ侍りける　蓮生法師

新勅撰旅

古へのむすひしちきりしはさこそやまゐの山井の影のみ見えて（以山井自宣出）　待賢門院堀川

同恋一

袖ぬれて山井の清水いつまても人見すなさて影を見るらん　興風

続後拾恋下

結ひつる契りはふかくおもひしにとしや影絶えし山の井の水　信実朝臣

続後拾雑中

山の井のあかて別れし影見えていつまてかゝる影をくみはなさし

弘安元年百首歌たてまつりし時　院大納言典侍

新後撰恋四

今やしる我結ひおきし契りとはなかれて山の井の浅き絆を思ひしらるゝ　菅原宗信朝臣

影たのみ見しをかはらの跡として結ひし水の山の井の水

百首歌たてまつりし時　藤原大納言為世

山の井に浅き契りのかはらすは結ひし影さへ見えしあすの月ありける

逢坂山中　　　待賢門院堀川
山の井の浅き心をおもはれは影はかりのみ人に見えつゝ
大納言為氏
同恋一
影をさへいまはそ人に結ひかけて浅香の山の井の水に
濁しつゝ　　　源兼氏朝臣
同恋四
山の井の浅き契のかけてたにくみしらぬ影も結ひてまての袂なりける
恋の哥の中　　　平貞照
同
ちきりしもさこそ山の井の忘れなてほとけし浅かる影も絶れし
寿仏院
新千載恋上
たのめすよ契し事は浅からむ山の井の結ふ人を波をみしるそこれ
新拾遺恋三　　　後京極摂政太政大臣
せきとむる山井の水の影もなく見しは浅くも結ひしかな
続古今恋二　　　平親清
見るまゝに人の心は浅ましく浅かりし岩井のしやましの井の水
崇徳院讃岐帥
同四
ぬるからぬ契なりけり結ひ山の井は浅くもなれけり
三百六十首　　陸奥　岩井　　曽根好忠
水草生し深山の岩井夏くれは涼しさまさるつけのゝ道かよはる
百首御哥　　慈鎮

はる雨に起し思ふや山の井のなかれもきよく蛍なるらん
為世卿公宗家

赤集
手に掬ふすむ岩井は清水や先草の露にも枕めすとや結ふらん
信角

掬ぶつもちかぬくさ世山の井の底しき人のうけやみゆるそ

源氏若紫郎女御文にも いはぬ猶んしるりけれ
はるかにかはかりそなたちかきにもあんなりとやへらまはし

源氏
起しく浅き中なるにて
浅香山あさくも人をおもはぬになと山の井のかけはなるらん
御返し
くみそめてくやしときゝし山の井の浅きなからや影をみるへき

磐瀬郡五

先代旧事本記石背国造志賀高穴穂朝御世十二景行代故建許侶命功建弥依米命定賜国造

四十四代元正帝養老二年正月乙未割白河石背會津安積信夫五郡置石背国

四十八代称徳帝神護景雲三年三月辛巳磐瀬郡人外正六位上吉祢侯部人上賜姓磐瀬朝臣大国造道嶋々足之所請也

神名帳磐瀬郡一座小桙衝神社

五十六代清和帝貞観五年十二月甲戌陸奥国磐瀬郡人正六位上勲等吉弥侯部豊嶋賜姓陸奥磐瀬臣其先天津彦根命之後也

同六年八月己亥陸奥国岩瀬郡権大領外正六位上磐瀬朝臣長宗借叙外従五位下

同七年十一月己卯陸奥国磐瀬郡大領外従五位下磐瀬朝臣富主授外従五位上

磐瀬社

在須賀川駅口右邉山上建鎌足神社

みちのくの浅香の沼を今はいついつそせのわたりさつらん

よみ人しらす

會津郡 六

旧事本紀曰二十三代清寧天皇
詔以物部木蓮子連造東海陸奥諸国分大
国出州分大郡出縣自陸奥出津軽會津篠
生出羽定掠国造規帰縣主別紛宮田首田
分別弗慥屯倉至此

四十四代元正帝養老二年五月乙未割會
津等郡置石背国

四十八代称徳帝神護景雲三年三月辛巳
陸奥国會津郡人外正八位下文部庭融等

二人賜姓阿倍會津臣
五十代桓武帝延暦八年六月甲戌入間廣成池田真牧安倍黒縄討賊敗別将會津壮麻呂已下戦死
神名帳曰會津郡二座 大一座 小一座 伊佐須美神社 名神大 蠶養国神社

會津山

在猪苗代湖東蒼嶺亘南北而白雲遠山腰積翠聳青空是所謂磐梯山也嶺上見隹炯湛湖水碧鱗畳紋山下有毒石觸之者乃死

土人曰之殺人石蓋殺生石之属乎

後撰集
友別るゝ世まてわかんみちのくへまかりけるにつかはしける　藤原滋幹女
君をのみしのふの里へゆくものを會津の山のはるけきやなそ

千五百番　佐楊殿照
ほとゝけ麓は會津の山なれはいかにかひける堂つをやきかね

萬葉集
題しらす　會津山　よみ人しらす
志保てしてゆくすゑのをいつは山そらをすくふ所を知るをは

堀河院百首　仲実朝臣
會津山まつの峯の雪をよそにしてもみちはなけれと(とイ)ひとかなしかる(つらイ)

色葉和難集十一にいはくあいつねとかきをと云
雪の降時はなくもしらぬ野にふりて火をたく
やなくなるを二三尺斗なりのきくしに火をたきし
しそやわらなさらしくて鹿の目をいふしはるる代
物はしくわりをいふなくへしとふもと火をとき
也とあるしはちおさむりくまの名なると
藻塩草會津嶺 奥州 しのふのさと とりし

會津嶺
前所謂磐梯山是也持出諸山峻極高大故
称會津嶺

藻塩草 むつしう あいつねのくにあさと云
陸奥国歌
安比豆祢能久尓乎佐杼抱美安波奈婆々
斯努比尓勢牟等比毛牟須婆左祢

會津里
夫木集
かくれなしやかまきやるみちのくの會津の里も名に残きを 藤原宗至

會津関
藻塩草 奥州 夫木集 会津のさかい 出るる明
會津の關 俊頼朝臣

まゝ本

今さらに会津のせきもなしといへはかくなくしてもぬらす袖川

會津川

藻塩草　会津川　奥州　兵没　出羽

六帖

心みにいかにして渡し会津河其名を水の流しゝけるかな

猪苗代湖水

近于若松篠山地在磐梯山下尤大湖也

塩井

若松釆沢境有大山土人称六十里踰殊俊嶺也山頂生塩出于樹根左右但出于右者多湧于左者少出者取之不尽汲而無竭於中華亦四月雲南塩井之類似羅襄以塩井冨者也

諏訪神社

在若松城中為鎮守祀建御名方命乃大已貴命子ら信州諏訪同社畔有神石高六尺廣可三尺以竹籬圍之有人問之石對曰誰呵祭之以醴酒

羽黒神社

勧請出羽羽黒所祀乃稲倉魂也

国立公文書館
National Archives of Japan

養蠶社

在城下市店毎歳蠶事既畢分繭称絲效功
以献神喜式所謂蠶賣国神社是

白河郡 七

前代旧事本紀第十白河国造志賀高穴穂
朝御世天降天田都
已自直定賜国造
同代五十有三年秋八月丁卯朔天皇欲巡
狩日本武尊所平諸国冬十月從海路已而
幸常陸尚到白河関 此時世已有関門備可見
四十四代元正帝養老二年五月乙未割常
陸国之石城標葉行方宇太亘理菊多六郡

置石城国割白河石背會津安積信夫五郡
置石背国
四十五代聖武帝神亀五年四月丁丑陸奥
国請新置白河軍團又改丹取軍團為玉作
團並許之
四十八代称徳帝神護景雲三年三月辛巳
陸奥国白河郡人外正七位上文部子老賜
姓阿部陸奥臣同郡人外正七位下靭継人
賜靭大伴連
五十四代仁明帝承和三年正月乙丑詔奉
充陸奥国白河郡従五位下勲十等八溝黄
金神封戸二烟以應国司之祷矣採得砂金
其数倍常能助遣唐之資也
同十年十一月庚子陸奥国白河郡百姓外
従八位上勲十等柏造智成戸一烟改姓為陸
奥白河連
同帝嘉祥元年五月辛未陸奥国白川郡大
領外正七位上賜姓阿倍陸奥臣
神名帳曰白河郡七座 大一座 小一座 都々古和
氣神社 名神大 伊波止利和氣神社 白

河神社　八溝嶺神社　飯豐比賣神社
永倉神社　石都々古和氣神社
五十五代文徳帝齊衡二年二月癸丑以陸
奥国永倉神列於官社

関山明神

乃都々古和氣神社是也往時関山去今新
宮東可二十里松杉欝々峙于白河城外駅口
今社地在白坂奥野之疆建両社為関山神
焉有二寺右曰和光山豊神寺陸奥地也左
曰宝壽山正願寺下野地也右額黄檗徒高
泉所書也
神社啓蒙曰白川都々古和氣神社在陸奥
白川郡一宮紀曰大已貴命男味耜託彦根
命也
十二代景行帝巡狩到此関門事見前篇
四十九代光仁帝宝亀十一年十二月丁巳
陸奥鎮守将軍従五位百濟王俊哲言已
等為賊被圍兵疲矢尽而祈桃生白河等神
一十一社乃得潰圍自非神力何存軍士請

預幣社許之
五十四代仁明帝承和八年三月癸巳奉授
陸奥国勲十等都々古和氣神従五位下余
如故

白河関

如今詳関山之地理関門之左右則高山也道路之通行則狭隘之地也雖未能極山谿之険至于控阨険要束制咽喉之設則足以為保障奥羽之国也縦令受大軍于茲支之関下之坂口張堅陳于前後進精兵于左右則豈容易得犯其険隘敗其利兵乎不知往昔何人選防禦之術而闢関門于斯地以固関東之夋乎可謂精于兵法熟于地利之人也和哥皆咏古関門者也

拾遺之詠
みちのくの白河の関をこえて侍りける　平兼盛
たよりあらはいかて都へつけやらんけふ白河の関はこえぬる

後拾遺集東上
白河院にて花を見てよみ侍りける　民部卿長家
東路の人にとはゝや白川の関にもかくや花はにほふと

常陸それの郡にみちのくにへこゆる侍りける
いひつかはしける　　中納言宗兼

日記
かへと扱兄のおのか心へと白川の関をこゆめと思ハなるゝとなりける
みちのくに下りまかりけるに志ら川の関にて
よみ侍りける

能因法師

都をハ霞とゝもにたちしかと秋風そふく白川の関

著聞集能因都にありなからこの歌をいたさ
さんこと念なしとおもひて人にもしられす籠居て
久しく籠居ていろをくろく日にあたりなして
して後みちのくにのかたへ修行のついてによみたり

よみたりとて披露し侍りけるとそ
白川院鳥羽殿におはしましける時おのことも
うた合し侍りけるに卯花をよめる

藤原季通

千載夏
見て過る人しなけれは卯の花のさける垣ねや志ら川の関

嘉應二年法住寺殿上歌合に関
路紅葉といへる心を侍る

源三位頼政

都にはまた青葉にてみしかとも紅葉ちりしく志ら川の関
袋草紙云頼政ニ首俊恵撰するの下りし遠き

門院は庭上におりて台に昇給ひおちらこそと見
給ひし我殿に来くよまれてちるにてしるを
其の夜供給ひかうさいはさよみて當日まて参
ひとつふひとく俊恵をよひくつんきふれきれハ供うさ
きかは錦因りに秋風の小さく志て川の昇とらふ
うことに似たく侍りされて去年ハ出てへさき無まし
奇なるとりおうさ哉に御てかくもとるさありてん
水無とれよ兄哉も我見よされにつとて
遊とも無記さこよなうていつさてわたらふひきれハ
いまま車さうしよきへ無くふれなるも時貴唐后

そのつひをも侍してさうしハ之をもとへきれしてそ
後に科をえたる也中へしはいひひけく出る
後にかくとも度ことの奇おもひのとく出てへして
勝命にきかれハ海りて其我ちる頃ひいひはうりきこう
きうにて我見にかく来りやしきうさしつかて
勝命申さうし後ちといふなくよ我うしるめ
世孫清に後待としみいとしきこゆるなしつるを
なんさつくらうとちあふへ侍りし此我俊恵かやさ
つとは侍りし
羈中歳暮といへる心をよめる

同 旅

東路に年もへぬるや旅衣しほる涙の白川の関

僧都隆性

續古今 秋

逢坂をこえしはきのふと思ふに秋風に来てこゆる白川の関

寂蓮法師

藤原秀茂

同

都出て日数をみるに旅衣したひぬるかなきく白川の関

従三位頼綱

松なくて猶見えすや白川の関の波なる塩釜の浦

東路はまたうきふしのみかは日数つもる

つらく秋にもなるとぬれはゆき女

續拾遺 旅

白川の関まで行かぬ東路も日数経ぬれは秋風ぞふく

津守国助

観意法師

同

夕暮に都出てし秋風はとまるやさきに志ら川の関

見る人もなくてまたるゝらん侍かる

藤原雅経女

新後撰 旅

都にて吹きしかと秋風は越えて身にしむ白川の関

法印隆弁

玉葉 旅

越て来ても猶立ちへたて東路は都のかたのいそし白川の関

皇太后宮大夫俊成

続千載秋上
月をみて千里のほかをおもふにもこゝろそかよふ白川の関
源邦長
秋風のおもふきしらて吹そめて旅寝しきしら川のせき
続後拾遺冬
関霜を　大江貞重
おふし旅の秋の白妙にきえなれぬ霜のしら川の関
をさへしるらし　津守国冬
同秋下
旅立し日数のほとへは道芝もみしるらむ程にきる白川の関
堀河院百首おなしせ紀　祐子内親王家紀伊
たまぬさを枝にひきかけやれみちのくの萩に流るゝ白川の関
源重氏朝臣
かへさにはわれはけふ白河の関こえて程けはかすて日数なかりける
澄覚上人
ゆき暮る人しはみしらは見えさりしを吹く秋の人清る白川の関
みちの国へ修行してまかりけるにしら川の関
にとまりて所からにや常よりも月おもしろくあはれにて
能因か秋風そ吹とやきこえけんをりいつなりけんと
おもひ出られて名残おほくおほえけれは関屋の柱
小出付きみ　撰集
詞めちに河つきのうきへ修行し侍りける

白川北関なくて白河の関をこゆれハ関屋の
柱に書付侍りしとかや

西行法師

山家集　又新拾遺旅
白川の関やを月のもる影ハ人の心をとむるなりけり
さぬみのく修行しけるをいにしへの事とも
柱にしてあるなれと能出て日数ありしつゝ
宮これハ霞とゝもに立しかとの秋風そふくこゝ
耳みちの人の氣色も川もおもひしられくも節
◯
アすう
越出て相坂越しけるをまてともろうとも見白川の関

丹波忠守朝臣

新拾遺旅
今日そ我日に越ぬる秋風の音にそききし白川の関

羇旅　　後九条前内大臣
◯
秋風にきゝし白川の関こえてあすや越なむ嫏の里の山

大蔵卿為博
◯
わつかさハ年こゝへぬ東路やをとみを越し白川の関

左大臣

同新後拾遺旅
越てハなを見程く出し月の日に秋越ぬる白川の関

関路秋　　平光俊
遥人もきてしら川の関こえて秋風吹ぬれ流てすし

恵羅寺　　　　　　　　　　　　源仲光朝臣

尋ねてゆく人もなこの奥にそ有けり志ら川の関守もなし

建保三年百首歌めしける時　　　　順徳院御製

名所百首下旬

けふとても八数の八重をこえて越ゆる志ら川の関　　　　定家朝臣

白川の関の世にも思ふらし志らぬ秋はいつまて止らし　　　　家隆朝臣

志ら川の関のみちのくの秋の色も身にしむ夜半の嵐かな　　　　定家朝臣

旅の御伴にて

白らぬ行く人をたにありとて留めしも君か白川の関

たえぬ道のあとそ雪にうもれける　　　　源季広

玉葉

志ら川の関屋をもるらちらみけりくしこまちの空そうき

建仁元年影供歌合　関路鶯　　　　家隆

夫木

雪のこる白川の関の戸の岩にの志らきく鶯そ鳴

治承二年右大臣百首歌　　　　俊成卿

同

何ゆへにさくら来ぬにまた霞霞中にもちりしく白川の関

あつまちの霞をわけてもよう[illegible]ふき川の関
慈鎮和尚

右衛門督家哥合
皇太后宮大夫俊成

白川の関にちるさくらしくもみれはなきけの道もさうなる流れ水かけて

光台院入道二品親王家五十首関路を
西園寺入道太政大臣

山桜をは鳥を明ほのゝ風にまかせてまつちりかゝる関

[illegible]林哥合関路落葉
前大僧正道恵

秋をまたてちりちるもみちをうつしひて散かれ白川の関

建仁二年五首哥関路を
俊成女

とこはまた月日もちもせけて秋風吹し白川の関

土御門内大臣家哥合
前中納言定家卿

夕附日入ぬる都はまたさかぬ紅葉さける白川の関

建保三年名所百首
正三位忠定

越え行人須木のはゝや落る秋の霧さす白川の関の風

最勝四天王院名所御障子
俊成女

同
越きてかく山路ハ雪にうもれて名をのミ留し白川の関

同
　　　　　　　　　　　　　　　後徳大寺大臣

同
白川の関の秋とハ守しかと紅葉ちる川霧らる山の風のをち

名所歌合　白河関
　　　　　　　　　　　　　　　藤原忠隆

同
頼かりの末の松山ゆかりの雪踏越せし白川の関

家集に関路雪白川の関
　　　　　　　　陸奥
　　　　　　　　　　　　　　　民部卿為家

同
みちかき松の木末ハ小雪にも深く松の名たゝる白川の関
　　　　　　　　　　　　　　　後京極

同
河守ぬ年を春の霞も立そめん春のひかりさす志ら川の関

時広朝臣方角歌　ひつしさる

同
わほ草
みちのくの白川越えて見しかハ一ついつ川しさるからくまのそろけき
　　　　　　　　　　　　　　　兼輔

堀川百首
　　　　　　　　　　　　　　　中納言師時

同
志ら川の関屋を秋ハ霧なから月影のもるゝ関の…

秋風抄
　　　　　　　　　　　　　　　慈鎮

月なを都へおもふ秋の霧つゝむ白川の関

うちはへて秋はくれとも見すてゝ色かはる白川の関路

詠藻
　　　　　　　　　　　　　　　俊成

色しるき道さへつもれ白川の関

雲は深岩こえて滝にさそひゆかる花も散かゝる白川の関

為氏

白川の関やの月のかけしらくてのよふに岩そてしちらい哉ん

西行法師

夫木集

朽わたる志のゝかたおくへ来ましやは越えかゝりし白川の関

後鳥羽院御製

同書

雪ふりて袖に吹路も絶えへしまて志つ川の関は嵐なりし

建保百首　下句

定衡

みちのくの志のふ山路を越えてしも猶ゆくさきは深し白川の関　名イ

俊成卿女

なかなかにかくれ捨深きゆくかたもえの白川の関の夕霧

兵部内侍

いかそれは山つくを果て白川の関吹あらしのあきのゆふ暮

康光

行末もまて露深紀の袖をこえてさまれ白川の関路なりけん

宗久紀行に何つゝ侍しめ深きしはいつき
し越所せまれはしめたもとゝこゑしき
侍るまゝ夫あゝ旅を出侍らしはまて此秋は
末に此関を越侍らしかは古さ旅は涙袖国
うみやなをは霞とともに出しかは秋風そふく

志ら川に舁と称しきたる事なりきゝとしてあるを
見ゆるをきられ侍るかの絵図をあはせ見るに
根よりの境にいましてまたこゝんちやうに念なりとて
いは済ましく人のたるしうちよりしはく志らしいさるを
かくてあるにはてよみきたりて披露しけるとなん
うや一二度ならきゝしくこゝろみるや八千代
の紀なにいふもののたまひ侍るとおほけさの
古文書などの水にしおんなきとむまくしてたるく
ともしたまひいさゝかあるそ侍りしてたるなと
きたるを侍し侍りしとてわれあるかれく事し

与侍りしよし
散まよふやからん秋風に身をなしつゝる白川に舁

和泉式部墓

在石川駅中郷人曰之下泉

按和泉式部父越前守正四位下大江雅輔母越中守保衡女上東門院侍女後嫁和泉守道貞仍称和泉式部其女乃小式部内侍共於和哥得聞秀之佳名胡奚終于東陸邉地耶其墓乃在洛東北院尤可怪

磐城郡　八

旧事本紀石城国造　志賀高穴穂朝坂連許呂命定賜国造

四十四代元正帝養老二年五月乙未割石城等六郡置石城国

四十八代称徳帝天平神護二年十一月己未以陸奥国岩城宮城二郡稲穀一万六千四百余斛賑給貧民

同神護景雲三年三月辛巳磐城郡人外正六位上文部山際賜姓於保磐城臣大国造

道嶋々足之所請也
五十四代仁明帝承和七年三月戊子陸奥国磐城郡大領外正六位上勲八等磐城臣雄公遄踏戎途妄身決勝居職以来勤修大橋二十四処溝池堤三十六処官舎正倉一百九十字宮城郡権大領外従六位上勲七等物部已波美造私池漑公田八十余町輸私稲一万一千束賑公民依此公平並假外従五位下
按雄公已波美之為人也克舎已而救人逞自力而奉公義可謂有裨益于国家之人也後世為法之則其功績亦不可量焉然従没于篇中而無識之者矣且夫両郡有司吏民讀之仰其志則庶哉於職分亦是以尽其所守也嗚乎善人哉
同十年十一月己亥陸奥国磐城郡大領外従五位下勲八等磐城臣雄公書生里川郡大領外従五位下勲八等靭伴連里成並授従五位上褒公勤也
夫人之処世雖一旦得之無其實則竟失

之而無見其所成就爲慧虛名者則久而
以衰矣雄公向以書蒙称誉今已四歳未
嘗災初志功業不衰焉重賜美名別又以
書生見挙宜哉功烈之傳于今也里成亦
想好人也
同十一年正月辛卯陸奥国磐城郡大領外
従五位下勲八等磐城臣雄公戸口二十四
人男十四人女十人磐城臣貞道戸口四人
男三人女一人磐城臣秋生戸口三人男二
人女一人賜姓阿倍磐城臣

同帝嘉祥元年五月辛未磐城国擬少毅陸
奥文部臣継嶋賜姓陸信陸奥臣
神名帳曰磐城郡七座 並小 大国魂神社
二股神社 温泉神社 佐麻久嶺神社
住吉神社 鹿嶋神社 子鍬倉神社
五十六代清和帝貞観五年十月戊子陸奥
国无位八ッ壮姫小結温泉神授従五位下
岩崎郡 按乃岩城也下楢葉郡亦標葉之誤也
此郡名乃楢葉郡亦不見古来郡名

菊田郡 九

旧事本紀曰道奥菊田郡国造軽嶋豊明御代坂道許男命児屋祢定賜国造

奈古曽関

常陸陸奥邦疆相傳太古素盞雄尊東征登此山頭経此地而号名古曽関後人山上立宮社祭午頭天皇以素盞雄垂跡之地也六月望日行祭禮矣其地也闢山下而為関門焉高七丈余長三十四間濶三間余南常州多河郡青野村是乃太田備中守資重領北

奥州菊田郡関田村内藤右京亮領地東常州九面邑是乃高船輜輳之地民屋百余軒漁家亦相雜相去関山五町余九面以南山外乃平形海濵厺九面三町余是亦江村五百余間備中守封境西乃高山過山中六七町有往昔之関址今通行之道也後人所闢而非古昔之地其下曰名古曽坂此地往昔多櫻樹五十年前枯槁尽尓後領主祖父内藤左京兆義泰植百余樹今所存纔三十余株

五十六代清和帝貞觀十八年六月癸未陸奥菊多郡人丈蓋文字之誤部継麻呂大部濱成等男女二十一人賜姓湯坐菊多臣

寛平御門御くしおろさせおはしまして
御隠れ給ひて後人々さうそくまつりけるに
ちかうもえんしかもこれさまをきれいにつきく
御様にむかひはべりける

小八條御息女

そらかうハ涙にむせふかなちかとさきれきにはの衣の袖をすつけん

按寛平御門乃宇多帝也在位僅十年倦萬機屈政勢而退朱雀院昌泰二年己未三十歳而落飾以仁和寺益信為戒師焉是謂寛平法皇子曰身体髪膚受之父母不敢毀傷孝之始也又曰無不敬也敬身為大身也者親之枝也敢不敬與不敬其身是傷其親傷其親是傷其本傷其本枝從而亡故自天子至庶人壹是皆以脩身為本然今尊為天子富有四海人間之至極何以加之哉帝弗思之妄棄天位軽脱褰冕如今以崇高難得之身忽入浮圖俾

身体髮膚至毀傷之極尤可痛恨也夫有天地而有男女乃生稟之本人倫之始也於是乎天子諸侯已下各設之有制度而備其數焉因茲而人道立夫性全今身為浮屠而猶未免在深宮而近媚態矣故今后妃夫人発嗟咏嘆之怨者抑是何義耶是皆不能脩其身所以出淫佛帰法之非心也可不監戒哉

ま[illegible]東[illegible]来[illegible]いかに[illegible]をとみゆりける

源師賢朝臣

東路ハ勿来の関ハありものをいかてか春の越て来つらん

源俊頼朝臣

金葉集巻下

勿来てふことをハ君かたてゝくさ宮城野あ[illegible]ハ[illegible]陸奥の海の[illegible]けりかき勿来の関のあたりかなみちかきぬれハ[illegible]

源義家朝臣

吹風を勿来の関と思へとも道もせにちる山さくら哉

一日閲源君陸陽侯名社関之詠吟而審其意味蓋亦游優厭飫之氣象也実風標雅藻之作而固一世之雄也豈魏武横槊

之勇而已乎哉就想斯時蠻夷滑夏東奥
大乱仍以陸奥有兼天之器而奉勅祇役
師王師而征實天下之大事也夫將師之
於軍旅事之成敗得失兵之利鈍勇億命
之死生存亡咸所以繫于主將而是亦天
下之重任也且夫客路之労々途程之漫
々其間細馬馳驅山野暴露辛苦难抑幾
何哉何遑及歌曲咏吟之娯耶况又取臨
天下之大事身処天下之重任乎然侯在
武門而称海内之英雄且学江師而聞聖

賢之遺法智謀兼備勇敢秀衆華夷畏之
如神於是視賊也猶弄嬰児使兵也猶運
指掌故雖過関山険阻之地肚裡悠然而
於其愛風光之情亦露然而生於是乎不
得止而乃発吟興且對落花之飄零也遂
寫品題而乃朗唫云聞者愕然驚其勇壮
風雅之度量矣自是都下相傳美之人知
家藏剰五條三位収之撰集以上達叡
聞天下後世足以識從容不迫之氣象観
大膽勇猛之良器矣烏虖依一首之咏吟

而著無窮之識趣焉往昔程夫子説易曰凡師之道感和並到則吉也是不幾所謂感和並到者也非耶又有言曰師師總衆非衆所尊信畏服則安持得人心之從又曰才謀德業衆所畏服則是也是皆足以備于斯侯矣宜哉敗夷虜于坎險之中致大平于數年之間今聞廣誉徧天下後世可視其實矣或曰於虞之和歌也有似通曉其意而實則未理會者其説可得而聞也荅曰予素非知倭歌者如何得句解

字釈哉然試推其理而考其旨則略似有可領會其大意者矣夫関之為言閉也扃也所以識其異物察其利害而禁非常也故有衛人而剽掠頗越者則必加其禁錮致其刑戮者也豈忍究然坐視其暴逆哉是乃所以設関之為名也今山花之値春風而飄零落尽者猶行旅之値衛人而剽掠頗越也尤不可不加其禁也雖然不能以閑扃専制彼春風而微々習々却委其飄零使山花空満于行路上豈非失閑扃

之実者哉故痛挙其関也不関之実而益
質空名之罪也如是可謂能述衍風光之
情而却罪関之不称其名者也向尊敬有
詩曰留春不用関城固花落随風鳥入雲
其大意與僕倭哥相似西行吟杜鵑句中
有言曰須専鳴声辛山田杉下也僕意亦
在此専字是以天下後世所為絶唱也

新勅撰巻一

みるめかる海士のゆきゝの湊路に名こその関も我はすゑなくに

小町

西行法師

東路のしのぶの里にやすらひてなこその関をこえぞわづらふ

よみ人しらず

続後撰巻

ほとゝぎす名こその関のなかりせば君がねざめにまづぞきかまし

實方朝臣陸奥に住侍りける時五月
まではほとゝぎすの声きかぬよし都にはきこえぬ
らん杜鵑関のあなたに身なれはきこえぬ
といへりける返事につかはしける

後深草院御製

新後撰巻三

都人名こその関の名もつらしゆきてはとめぬ身にしられて

無き清見潟の中に

一品資子内親王

玉葉恋二
あつま路よりも名こその関もあるものをいかてか人のたのミにきこゆ
和泉式部

同三
名こそとハ誰かハいひしいはねとも心にすふる関とこそなれ
安嘉門院四条

同五
はてやさは越しもの ことにまてハ名こその関の関守もなき
前右近大将頼朝卿上りて侍りけるに
かはつまへ下りきたんとやきらんはつゆしきる
前大僧正慈鎮

続千載旅
末の世の関に名こその関の名を君をもとむるすゑに来てる
前右兵衛大将頼朝

同
都にて君にあふ坂ちかけれハ名こその関ハ遠きとそしれ
右大将道綱母

新千載恋二
さしてよる逢坂ちかしと声にきく名こその関やかすかさなりけん
贈従三位為子

新拾遺恋二
世中ハしたはゝ名こその関の名をあふ坂をいつとうつるに
前大納言隆房

いつはりのまことをおもひしつれの通路も来ぬ名こその関はなるらん
前大納言為氏

新続古今恋一
いとひこし身の名こその関の名もつれなき中やけしなるらん
俊頼朝臣

新葉

東路の白河のせきのよそなるたにゆくへきほともわかるらん

堀川百首 下句　権僧正永縁

あつまちに趣しそのとしてたゝ白河の関の名越つゝそ見れ　大納言師兼

守ちかのしる昔語りに休みしきや白河の関をこえなん　顕仲

ならひくる旅寝にまさるたひつまちに花や白河の関とならん　河内

忘るなよ聞人ふるさとに越へなむ白河の関を流る程久ん

建仁元年哥合　家長朝臣

夫木集下句

東路の白河の関を越くるに人をはふかくしるよしのあさ

名所百首　侍賢門院

行やらて世をいとひつゝやあらまし　東路の白河の関の関守になる

よみ人しらす

東路の白河の関に住なりて旅人のみそあはれなりける　光俊朝臣

春風を白河の関のまとにして遠くいく日まて旅寝清し華

年時鳥といふ事を　前右兵衛督為教

なけやいま夏きぬる時鳥白河の関の関守いふかも

寛治二年百首　後九条内大臣

浮沈にも名取の関やつくらん身に知らぬ恋にぬれきぬもき
秀俊
名のみしてなき名取とはいへと姉妹にこそさはゆるを関守
兼昌
都人いかにしておもはん立出て名取の関にさはるやいかん
道経
みちのくに来る人の身なれとも名取の関のゆるしに見えける
千五百番歌合
顕昭
帰る来てあはんやそれにつゝしみて名取の関の名たての空
小侍従
かくなりの名取の関の何とせる人に人をなをと思ふらん
文貞公
あらはれに名取の関も逢坂の山の名のたつかなへきに
中務
待人をなとかへりみる絶しけれ名取の関に心をかけゝし
なとりの関
みちのくの名取の関にきけれともきゝし名をとは絶えにそへき
名古曽関
俊頼
名とりの浦の名取の関もなへてこそ人に心のゆるさぬにこそ
奈古曽山 見名寄歌枕

是乃関山也前所謂名社坂之山也

立ちかへり御時分合名社の峯

貫之

佐美

知らぬとも小止まりとも行末を名所の山の峯にもとめ次

九面濵

関山東濵多文貝細設盆池尤可愛

九十九や浜千鳥ゆく道もなし旅ゆく名所我身峯といはん

西行法師

四倉濵

在田綱村近干女濵有善逝堂土人曰之波

立薬師其堂飛弾内匠所作也

みちのくの那須の野辺にて旅寝して見る人の浜ちどりの寺

西行法師

久濵

近干梢葉郡古曰之好見濵

玉なり世岩鉄の山をきてるまく人とさかきの浜ふかみ給ん

和泉式部

佐波古御湯

相馬領曰之湯本駅西南有大嶽曰三箱山

古之佐波古山是也三箱文字土人誤佐波

所記住吉神社也

古者也其山下有温泉是乃佐波古御湯也
喜式温泉神社是也

物名　よみ人しらす

藥塩卅　同

（松まさ）いつとしてまつらん人のすむ里をさいはひ見ゆる山のはのさう

あまとふなけかし君をみちのくのはなのこゝといそせてふるな

女濱

一名小石濱有鹿嶋神社神名帳鹿嶋神社
是也

岩城判官居城是也建住吉神祠是亦喜式

標葉郡 十

四十八代称徳帝神護景雲三年三月辛巳標葉郡人正六位上文部賀例努等十人賜姓阿部陸奥臣是亦嶋足之請也

五十四代仁明帝嘉祥元年五月辛未標葉郡擬少領陸奥標葉臣高生賜姓阿部陸奥臣

神名帳標葉郡一座 小　苕野神社

標葉境

堀河百首　顕仲

東路のしねはの原にやとりして雲井に見ゆるつくハ山代

日本政府圖書
大日本帝國圖書之印
太政官文庫

国立公文書館
National Archives of Japan